



りしんねんだいき

離神年代記

第五話

集まる

秋本カイ

画戸谷展洋

亜子

引き出しに、パスポートがなかった。そのことが、結局、森和子の口を噤ませた。

(佐菜子が、男と出て行った)

片田舎の小さな村には、わずか三日で、この事実が出来上ってしまった。亜子と自分たち夫婦は、見捨てられた家族になったのだ、と和子は感じた。

そして、まるでそのタイムリッグを計ったかのように、一人の男が訪ねて来た。

『休場朗』

彼は、佐菜子からの依頼を受けたという。亜子とその父親である白居明彦のDNA鑑定書を持って、サクヤグループ代表取締役である笹原由宜氏に会い、亜子の将来について話し合っ欲しい、というのが依頼内容だと説明した。

何もかもがうそばかりだった。けれど、選択肢はうその中になかった。笹原某氏の亜子を養子にしたいという申し出を受けるか、断るか？

和子は、何度も繰り返し、今度のことについて、考えてみた。

突然姿を消してしまった一人娘。交通事故のような不測の事態に巻き込まれたと考えるより、自分の意思で行ったと考える方がいい。それなら、彼女は幸せに暮しているかもしれない。子どもを見捨てたのではなく、将来を考えてその笹原なる人物に託したのだとしたら仕方ない。自分が育てるよりも、亜子の為になるという選択であるのなら、それを信じるしかない。

亜子の父親がそんな大企業のトップに連なる人物であり、病のため、佐菜子との結婚を諦めざるを得なかったのなら、むしろ頑なに亜子の父親の名を明かさなかった娘の心根が不憫である。

が…… それでも、納得がいくわけではない。(なぜ、何も話してくれなかったのか？ なぜ、姿を消したのか？ それは、本当に佐菜子の意思なのか？)

だのに、和子の夫は、何も疑っていない。

サクヤグループの笹原由宜という名に、飛びついてしまった。すべての怪しさを払拭するのに十分なほどの、明々白々な人物であるらしい。

「経済界で知らない者はいない」とまで、夫は言い切った。

「本当の実力で言ったら、日本で一番の企業だ」と太鼓判を押す。

(本当の実力……) という所に、何が含まれているのかは知ら

ないが、片田舎の村長の太鼓判にどれほどの価値があるとも思われぬ。

ただ、近所の親しい駐在さんとの話の中で、

「無くなっている物がないか、家の中をよく見てみたら」と言われ、いつもの引き出しに、佐菜子のパスポートのないことに気付いた。

本当に佐菜子は自分の意思で出て行ったのかもしれない。休場の話は、事実なのかもしれない。そう思うと、

「亜子を手放したくない」と言い切れなくなっていた。

了承の返事をする、何を考える間もなく、養子縁組の手続き、戸籍・住民票の移動、転校先の手配まで、あつという間に済んだ。試験なしでの有名私立小学校への転入である。信じられないほどの手回しの良さだった。

それでも、やることは山ほどあった。あれもせねば、これもせねば、と気の急ぐうちに、亜子が東京へ行く日となった。荷物も送った。出発の着替えまでさせた。ポツカリと手が空いてしまった。

何もせず、ただ迎えを待っていることが出来ず、もう少し置いておけばいいのに、さつき干したばかりの座布団をしまいだめた。昨晚、亜子の最後の夜ということで、ごく内輪の人間で集まった。

亜子は、食事を終えると早々に部屋へ戻ってしまった。確かに小学一年生にお酒の席はつまらないかもしれない。が、以前の亜子なら、『いいかげんに、寝なさい!』と佐菜子に何回も怒られなければ、二階の自分の部屋に戻ることはなかった。大人たちの間で、ぺちやくちやと喋り回るのが好きな子だった。

恐らく学校でもそうなのだろう。今度のことが決まって、担任の先生と話をした時に言われた。

「クラスでも、ポツンと立ちすくんでしまっているように見えることがあります。同級生たちも戸惑っています。環境を変えろ」という意味で、東京へ行く事は、ひとつの選択肢かもしれないね」

母親が、この子の目の前で、この子をおいて男と出て行った、周囲にそんな図を信じ込ませるような、亜子の姿だった。亜子がそうして引き摺っている以上、周りの反応も過敏にならざるを得ない。担任の一言も、この成り行きに異を唱える気持ちも失わせた。

昨晚、宴会もそろそろお開きの頃。お茶を飲み始める人、庭で月を眺める人、三々五々と散らばり始めて、空いた器を片付ける和子に、姪の桐子が話しかけてきた。

「おばさん、この間のテレビみてないんだ?」

「なに？」

「だからね、亜子の行くうちの話よ」

何からの繋がりで『だから』なのかわからないが、テレビの話は亜子と関係があるらしい。

桐子は、和子の弟の娘で、今年大学に入った。誰でも入れる大学だと本人までもが吹聴している。

「そんなに、話を飛ばすなよ」

桐子の兄、智也が間に入って、妹を嗜めた。

「亜子に関係あることなの？」

和子は、尋ねた。

「と、思うんだ。先週、戸山雅直主演のドラマがあつて、そのモデルがサクヤグループの人らしいって……」

「戸山？」

「マークくんよ、マークくん！ 『天使だつて、大好き』 見てなかった？」

「あんまりテレビは見ないから」

要領を得ない桐子の話を兄の智也が、補ってくれた。

桐子の大好きな、今若手ナンバーワンの戸山雅直が初主演した二時間ドラマが、智也の言によると、低予算でいい加減に作ったわりには、脚本がよく出来ていて、戸山ファンたちのお陰で視聴率も良かったし、あとからじわじわと玄人筋やサラリーマンのお父さんたちに受けているとのことである。

「どんなお話なの？」

「あのね、マー君がすごくかっこいいの。砂漠に、こう、じつと朝日を見つめる横顔が、メチャサイコー！」

「どうせ、鳥取砂丘あたりだよ」

「また、お兄ちゃんはそういうこと」

「日本の話じゃないの？」

和子は、話の脱線ぶりに辟易しながらも、亜子の行く先に繋がることなら、何でも知りたかった。

「ちよつと、話としては具体性がないんです。企業上の秘密もあるのかな、つて僕は思うんですけどね」

智也が説明を始めた。

「油田開発プロジェクトチームの一つを任された若い日本人が現地で、まあ、頑張る話なんですけど、いろいろ…… 例えば、日本でもよくある手抜きですよ。設計と違うボルトや鉄材が使われているのを発見して、全部やり直させたりする訳です。でも、日本国内とはわけが違いますからね。宗教・人種の問題。貧富の問題。何よりモラルと価値観が違う。働くということの意味がね。納期は大幅にずれる。人手は足りないのに、溶接の出来る職人がいない。」

とにかく、周囲に責め立てられる。それを、ガンと撥ね退けて、その上会社には何百億という、ちよつと信じ難い負債を負わせて、それでもやり抜くんですよ」

いつのまにか、そこそこでそれぞれに話をしていた年寄り連も周りに集まって来ていた。

「そりゃあ、すごいすごい」

大婆が、変な合いの手をいれた。

「それで…… その会社の社長が今度、亜子の父親になるとい
う笹原由宜氏だと思っんです」

「思っんですって、無責任な言い方だなあ」

智也の父親が口を挟む。

「そこらへん、フィクションのような、ノンフィクションのよ
うな描かれ方なんですけど、一昨日の週刊誌に、先週視聴率を
上げたこのドラマは、実話だったって言う記事が載って、サク
ヤグループが名指しだったんですよ」

「へえ、義兄さん知ってましたか？」

「もちろん、そのことは……」

和子の夫、利雄は、床の間の小引き出しから、パンフレット
を引っ張り出してきた。企業紹介風のパンフレットは、サクヤ
グループの系列会社が列挙され、企業としての社会貢献、海外
での大きな事業展開が写真と共に説明されている。

「私だっって、ちゃんと世間のことには耳を立てて、勉強しとる
んだ。その週刊誌だっって、読んどる。モデルになっているのは、
ほら、こいつじゃ」

利雄が指さした。パンフの最後のページには、小さくて顔の判

別までは出来ないが、砂漠を走る太いパイプを背景に撮った、
数人の日本人グループの写真があった。

「えっえっえっ、どの人！」

誰よりも先に、桐子が飛びついた。

「別にお前のマー君が、写ってる訳じゃないよ」

「でも、似てるかも」

「似てない」

「何でわかるのよ」

「わかるさ、キャラ男にこういう仕事は出来ないの」

智也がおもむろにパンフを取り上げ、和子に見せた。そのパ
ンフレットは、確か休場が持つて来たものだった。週刊誌のこ
とにしても、一昨日の夜、利雄の若い部下からの電話で知り、
慌てて買いに行かされた。翌朝、利雄はそれを持つて出かけて
行った。役場で自慢げに吹聴している姿が目につかんだ。

「でもねえ、智也君、そんなことになって、今、その笹原さん
の会社は大丈夫なの？」

亜子の将来にとっては、そちらの方が、大事である。
おおごと

「おばさん、覚えてませんか、四、五年前にあった油田の大火
炎事故！」

「そんな砂漠の向こうの話じゃねえ」

「あら、お義姉さん、あの時はガソリンが急に値上がって大変
だったじゃない」

そう言われてみれば、和子の記憶にもその騒動は残っている。

「ドラマによると、その桐子のマー君、こと砂漠の坊やは、日本に呼び戻されて、しばらくは窓際に追いやられているんだけど。幸運にも…… っていうのは、ちよつと言いが悪いかもしれないけど、その火災事故で壊滅状態になった油田で、彼が造ったものだけが、すぐに稼働できたんです。お陰で、金持ちの王様たちがこぞってサクヤグループに仕事を発注するようになる、というよく出来た成功物語なんですけどね」

「いやいや、それが結構作り話じゃないらしい。まあ、週刊誌によればの話だがね」

利雄が、酔いの回った上機嫌な顔で話し出した。

「その時、皆の反対を押し切って、砂漠の坊やを好きにやらせたのが、今のサクヤグループの社長だと言うんだよ」

「それが、亜子ちゃんのお父さんになる人ですか？」

利雄の腰巾着の助役が、座を盛り上げる。

「そうだ」

「孫の父親といえ、村長にとつては、息子も同然ですな」

「まあ、年齢は十しか違わないがな」

和子は、思わずため息が漏れそうだった。

（そんな夢のような世界に亜子を送り出す……？）

もともと和子の家は半農、もう半分は養豚業を営んでいた。

生き物が相手なので、家族旅行をしたこともない。いや、この

村の誰だつて、海外旅行をしたことはあつても、世界を相手にしているような人間とは出会ったこともない。皆が、亜子を通じて何かに繋がる錯覚に陥っている。亜子を手放すことによつて、自分たちがいきなり妙な立場に押し上げられてしまったような気がする。娘に去られた可哀な家族だつたはずなのに。佐菜子には、こうなることも見えていたのだろうか？

和子の座る縁側の前には、今ポンポンと叩いた座布団の埃のせいか、キラキラと光の筋が見えていた。『チンダル現象っていうんだよ』前に亜子が教えてくれたことがある。

亜子は、おかしな子だった。頭はいいのか、運動神経はどうなのか、妙にわかりにくいところがあつた。できることとできないことの差が大きい。いつまでも、歩かないし、しゃべらない。佐菜子は、知恵遅れなのではないかと心配していた。それが、一度出来るようになると、人並みはずれている。

（変わった子） そうした説明でいいのだろうか？ 和子自身の違和感は、そんな簡単に説明できるところにはない。同年代の友人に孫のいる者が多い。子どもより可愛いと口を揃えて言う。もちろん可愛いとは思う。でも、もし、本当に心の底から手元に置きたかつたのなら、もっと自分は頑張ったのではないだろうか？ 夫と初めての大喧嘩をしても、この養子縁組に反対したのではないだろうか？

この違和感は、なんなのだろう。亜子を可愛く思っていないのではない。それは断じて違う。佐菜子の子なのだから。でも、なぜ、どんな気持ちだが、自分にこの感情を生み出すのか、どうしても説明できない。

玄関の呼び鈴が鳴った。出て行くと、休場といっしょに、和子と同じような恰好の婦人が立っていた。中へ招き入れ、二階の夫と亜子に声をかけた。客間で、二人にお茶を出しながら、二、三言葉を交わした。

「亜子ちゃんというのは、佐菜子さんの付けたお名前ですか？」
婦人はそう尋ねた。

「はい」

「何か由来があるんでしょうか？」

和子は、思わぬ質問に、返答しかねた。

「いえ、なんか、明彦さんの子ということで、明彦さんの音をとったのかと……ふと思っただけですから」

(そうだったのか)

和子は、佐菜子との会話を思い出した。亜子は、月足らずで三月の終わりに生まれた。

「春なのに、あきこっていうのは変かしら」

名前を考えている時に、佐菜子はそう言った。

「そうねえ」

和子の返事は気のないものだった。

暫く思案気な顔をしていた佐菜子は、やがてきっぱりと

「じゃあ、亜子にするわ。アジアの亜。始まりの音」

と言った。

「苦労様ですな」

森利雄が、客間に入ってきた。後ろに亜子がついていてる。

「笹原氏は、多忙な方で、本人は是非森夫妻にお会いしたいと申しておりましたが」

慌てて休場が、喋り出す。佐菜子の依頼で動いているというのに、まるで笹原の部下のような口をきくのが不思議だった。

夫の無条件な信頼と同じだ。結局は、男という社会的な生き物は、相手の地位や業績にすべての判断基準を持つのかもしれない。

次に、婦人が笹原夫人であることを名乗った。

「夫に代わって、亜子ちゃんを迎えにあげました」

彼女は、和子たちに、意外という表情を読み取ったのである。

「私は、姉さん女房なんですよ。だから、亜子ちゃんのおかあさんというより、おばあちゃんの年ですね」

申し訳なさそうにそう言う

「亜子ちゃん、別におばさんと呼んでね。亜子ちゃんのおかあ

さんになろうと思ってるわけじゃないのよ。もし、おかあさんが帰って来たら、一緒に暮してもいいし……」

それは、また和子にとって、思いもよらない言葉だった。そうだ、佐菜子が帰って来たらどうなるのだろう。

「ただね。おばさんには、亜子ちゃんのお父さんと同じ年の娘が居ただけで、病気で死んじゃったの。亜子ちゃんのお父さんも病気だし。きつと、笹原…… おばさんの旦那さんはね、跡をついでくれる子が欲しくなって、亜子ちゃんのお父さんになりたくなつたんだと思うのよ。亜子ちゃんには迷惑な話かもしれないけど、少し一緒に暮してみてね、どうしてもだめで、帰りたくなつたらそう言つてちょうだい」

いろんな思いを含んだ言葉だった。思いもかけない所に、本当に亜子のことを心配してくれている人を見つけたような気がした。少なくとも彼女は、お金や地位で幸せを賈えるものどは思っていない。

亜子は、相変わらず何も答えない。

「いやいや、こちらこそよろしく願います」

利雄が、珍しく頭を下げた。

「急にさみしくなつてしまふと思ひますが、東京にお出での際には、是非お寄り下さい」

社交辞令によくある台詞だが、本気で言ってくれている気がした。夫人の言葉は、あまりに普通の感情の中にあつて、和子

のこの一ヶ月の、嵐の海に浮かんだ小船のような気持ちの昂ぶりととは、かけ離れていた。

最後に外まで見送つても、亜子は一度も振り返らなかつた。

その分も夫人が何度も何度も振り返つて頭を下げた。

もしかしたら、佐菜子も物陰からこの様子を見ているのではないか、と思つた。妄想であろう。

東京から帰つて来て、お腹に赤ん坊のいることがわかつたとき、佐菜子は口を噤んだままだった。我が娘ながら、何を考えられているかわからなかつた。その時ふと思ひ出したことがある。

佐菜子が、小学三年生の時である。

大事に育てた一人娘だ。他所よその子より、ずっと子どもらしい素直さを持つてしていると、親馬鹿なことを思つていた。(うちの子は、サンタクロースがいると信じている) テレビで、あんなに山ほど、お父さんがサンタクロースである、というストーリーがあるのに、気付いていないと信じ込んでいた。

それがある日、庭で洗濯物を干していると、窓を開けた子ども部屋から佐菜子が友だちと喋っている声が聞こえてきた。

「いいプレゼントをもらうにはね、お父さんやお母さんに、サンタクロースは本当にいると思つています、って言わないとだめなんだよ」

佐菜子が、プレゼントをもらえない友だちにそう教えていた。

裏切られたような気がした。子どもは、そうして親を裏切りながら、大人になっていくのだらうか。

それだったら、仕方ないではないか。どうしてこんなことになつたのかわからなくとも、仕方がない。

和子は諦めるしかなかった。

二人の男

駅で、休場は笹原弓子と別れることにした。他に立ち寄りた場所があつた。別れ際、ひとつ聞きたいことを口にした。

「笹原さん、怒ってますか？」

弓子は、何を？ とは聞かなかつた。すぐにわかつたのだらう。

「かなり、怒つてたわね」

澄ましてそう答えた。

休場は、独り身の身軽さで、あちこちをふらふらしていることが多い。それがいろいろな情報に繋がるし、葉子から出された『書く』という課題のヒントを見つけることになるかもしれない。

しかし、そうして人脈を作ることは、あちこちに貸し借りを伴うことでもある。借りつ放しというわけにはいかないことも

ある。それが、今回のドラマ騒動の発端だった。サクヤグループの後押しにいろいろ世話になつたテレビプロデューサーに、二時間ドラマのことで泣きつかれた。大物脚本家の持つてくる脚本があまりにつまらないというのである。

ちょうどその二ヶ月ほど前、砂漠の坊やこと、塚田瑛佑のところに転がり込んで、仕事半分、遊び半分で、周辺を取材した。これがメチャクチャ面白かつた。自分よりかなり年下の、塚田瑛佑の人物像に魅かれた。

砂漠には、紛争中の国がたくさんある。その戦争孤児たちを職人にしようとしていた。日本古来の親方弟子の關係を作つて、スティックに仕事に取り組む姿勢と、どこでも通用する技を身に付けさるのだと言う。他にも、語学、医療、科学。世界に目を向けること、水を引く技、とにかくあらゆることを、周りに波及させていく、震源地のような男だつた。

そこでつい、彼をモデルにした脚本を書いて渡してしまつた。ゴーストライターの役を受けてしまつたのである。

三日前の週刊誌に、サクヤグループの名が出た。まずいとは思つた。サクヤグループの、企業としての露出度は微妙な線を狙っている。葉子の秘密主義的などころは、笹原の代になつて少し薄まってきたが、これだけの大躍進をしている企業である。足元をすくわれることは、常に覚悟しておかねばならない。業績を吹聴するような真似はしたくないのだ。今の勢いなら、

むしろそんな必要はないし、出る杭になることはデメリットでしかない。

もちろん、マスコミに手は打った。幸い二流週刊誌の記事である。他社にそれを追従させないだけの裏工作は出来る。

「でもね、あのやたらに外面のいい笹原に怒鳴り声をあげさせるのは、海老沢先生と瑛佑君と休場さんだから。それに、今回は、亜子ちゃんのこと为本当に有り難かったみたいよ」

弓子は口元に笑みを含んで付け加えた。

「そうですか？ そう言われるとほっとします」

弓子は、亜子の養子の件に、休場が奔走したと思っている。もちろんそれもあるが、笹原の有り難がっているのは、どうか母親の消失を揉み消した事であろう。どれが功を奏したのかは、よくわからない。こちらの都合のいいように噂を流した。今回のテレビドラマの件は休場の落度ではあったが、タイミンが良く亜子の周辺の注意を逸らすのに役立った。あげくには、訪問の際に仏壇脇の小引き出しにあった佐菜子のパスポートを盗み出している。これは、さすがに心に引っかけた。いかに、もう使い道のない物とはいえ、休場にとって盗みは、大犯罪だ。家出する時に持ち出す物として、預金通帳やパスポートを考えただが、こんな簡単に見つけ出せるとは思ってもいなかった。

休場は、電車に乗る弓子と亜子を見送った。亜子はやはり一言もしやべらない。弓子も、特にしつこく話しかけるといふことをしない。時間をかけて馴染んでいこうとしているのだろうか。休場は、笹原の気持ちが不安だった。亜子を引き取ろうと考えたのは、明彦の子だから、というより、母親と木を消し去る現場を見られたからなのではないか。

休場自身、白居家の兄妹の持つ力について、よく把握しているわけではない。が、それは話の通りなのだろう。この白昼のどかな田舎町では、とても信じられないが、それでも、真実なのだろう。笹原は、亜子を引き取ることで、その真実をどうしようというのか。いや、これからだって、続いていくこの不可思議にどう向き合おうというのか。

（葉子の言っていた『書くこと』とは、この現実に向き合うことなのか？ だからこそ、笹原は自分にすべてを打ち明けるのかもしれない。書くことが、何かを救うのだろうか？ 書くことによって救われる人間がいるのだろうか？）

本当の所は、わからない。けれどもう、休場自身、後に引けなかった。真実に近付きたい、それを整理・分析して、文字に残したい。いつからか、この欲求に突き動かされている自分が、彼にとって、最も核になっている自分自身だった。

休場が、二人組の男を見かけたのは、弓子と亜子の乗る電車

を見送りながら、そんな思いに耽っていた時だった。強く印象に残った訳ではない。人影の少なかつたせいであろう。何気なくその二人の組合せが記憶に仕舞い込まれた。

その後、休場が立ち寄ったのは、福島県の寒村である。初めてここを訪れたのは、白居葉子に魅かれ、身辺を調べ始めた時だった。当時は、父の自殺、彼自身の辞職、母の葬儀と続き、生家までも売り払っていた。厭世的になっていたのも当然だろう。何に対しても心の動かない日々だった。葉子との出会いの強烈な印象だけが、灰ばかり積もった彼の内部の残り火だった。それが何に繋がるのかはどうでも良かった。白居葉子について知りたかった。知りたいという残り火を必死に掻き集めるしかなかった。

葉子の母、仲野幸枝の出身地……のはずであったが、仲野幸枝は、死んでいた。十六歳で、奉公先から逃げ出し、煌々と月の輝く晩に、寺の門の前で、一人ぼっちで凍死した。

次にここを訪れたのは、たまたま白居家の前で出会った芹沢富子を、車で駅まで送った縁からである。この村の大半の苗字が芹沢であることは、訪れた際の記憶に残っていた。だから、芹沢という苗字に引っかかって、いろいろ訊ねると、面白い話が聞けた。

福島県のその村と白居家にどういう縁があったのかまでは、

調べがついていない。しかし、村から白居家へ、少なくとも明治維新より前から、使用人として人が雇われていた。東京に出る時には、必ず白居家への縁を頼って行く。何代にも渡って、甥や姪、村の年少者の就職を世話して、また、その者がその下の者たちを世話する。そんなことが続いていた。だから、死んだ少女の戸籍を身元不明の少女に誂えるという、とてつもない融通がついしてしまったのであろう。

葉子の母親の戸籍が偽造されたものだとするなら、それはなぜなのか。母親は、何者なのか？ 白居家の近辺を聞き込むうちに、屋敷脇の小屋に住む『髪結いの気狂い婆さん』の存在を知ることになった。

非常に特異な人物であったらしく、周りの住人、特に当時、子どもであった者たちがよく覚えていた。老婆が子どもたちのからかいの対象になっていたということであろう。髪結い床には、行き倒れの所を拾われた女がいた。彼女の連れていた赤ん坊が、後に仲野幸枝として白居家に嫁ぎ、葉子を産むことになった。おおよそを計算してみても、その時、まだ十二、三ではなかったか。戸籍もない、学校にも行っていないほんの子どもである。

休場は葉子に書くことを運命づけられた、といってもいい。

それは、確かに当を得た人選だった。富子のもとへ、彼は何度

「も足を運んでいる。人の口を開かせるのは、信頼である。見知らぬ旅人であった休場は、持ち前の人懐っこさで、村人にとつてさえ、『富子婆さんの東京の客人』と認知されるようになっていた。当の富子が、嫌な氣のするはずもない。自分の話を聞く為、わざわざ東京から尋ねて来る客人がいるのである。」

「元気にしてますか？」

土産を手に、縁側から気軽に声をかける。

「おうおう」

富子は、婆さんか爺さんかわからない風貌で、齒のない口を開けて、歓迎の声をあげた。まだ七十歳半ばである。一年前の脑梗塞さえなければ、元気な年寄りのままでいられたであろう。七十を過ぎての寝たきりの日々が押し寄せてきた。体が動くようになって、まだらボケというのか、正氣の時とわけのわからない時がくつきり分かれている。

「この前の時約束した羊羹買って来ましたよ」

耳元で話しかける。白居家で働いていた時によく食べた、近所の店の羊羹をもう一度食べたいと言っていた。

「まあまあ、よく覚えとつてえ」

富子は、休場と話す時には、ほとんど訛りが消える。考えてみれば、十五年から四十年以上、東京に住んでいたのである。

（よかった）

休場は、その一言にほっとした。この前に来た時は、全く何の話も聞くことが出来なかった。

「この頃しきりと、おまえさんの顔が見たくてね。あれやこれや話しておきたいことがあるんだよ」

自分が呆けはじめているのを感じているのだろうか。こんなことを言われたのは初めてだった。

よく晴れた、静かな明るい日である。昔を思い出すには、良い日かもしれない。身に刺さる寒さも神経を澄ますのに役立つ。

「そんなもんだから、まあ、あの白居のおうちは、私にとつちやあ、ここから東京まで離れとる、そんなもんじゃない。距離じゃなくてね、遠い遠い世界に思えるんよ」

富子は、しばらく、白居家での日々を語った後、そう付け加えた。

「富子さんが、白居家に行つてすぐ、何度も何度もその使いに使されたうちつていうのは、結局誰のうちだったんですか？」

今日の富子には、今まで決して言葉に出来なかったことを語る覚悟のある氣がした。話から推察するに、先代忠保のまだ知られていない愛人のうちに違いない。

「その頃は、わかんなかったけど、あとからわかった、何十年もしてから……言っちゃいけないと思つて……だから、私が話したのは、タズちゃんだけよ。あの子は、口が堅いからね」

富子は、そこで言葉を切った。迷っているのだろう。沈黙は長かった。富子が口を噤むと、庭先の枯葉の微かな身動きさえ聞こえた。

「友康のうちよ」

「えっ？」

休場は、意表を衝く答えに、言葉を失った。

「それは……どういうこと？」

「友康は、先代様の子なんよ」

富子は、休場の驚きを気にかける風もない。一度糸の切れた風は、もうクルクルと舞い上がっていくしかない。

「でも、タズちゃんにも言っていないことがある」

富子は、何がなんでも墓場まで、口を噤んで持つていこうと決意していた。それは、彼女の罪でもあった。しかし、実際に今自分が壊れていこうという時に、事の重大さに怖気づいた。吐き出したくなった。吐き出して軽くなるという誘惑。今富子の目の前には、誠意ある笑顔を向けて、自分の話を聞きたがる男がいた。彼の好奇心を満足させるだけの切り札を富子は持っている。これは、墓場に埋もれさせるにはあまりに、甘美でスキャンダラスな果実である。

「それで、笹原さんは、嘉一郎様の子じゃけん」

休場は、もう相槌を打つこともできない。いや、しばらくは、自分が、何を話されたのか、意味さえ掴めなかった。

富子の家を辞し、国道沿いを歩いてきた。ふわふわと、足前に進むが、頭の中は堂々巡りである。富子の話が真実なら、友康こそ、葉子の従兄であり、笹原にいたっては、異母兄となる。年は笹原由宜の方が上であろうが……

(そんなことがありえるのだろうか?)

お気に入りの田舎道ののどけさも、目に入らない。風の冷たささえ、感じられない。

(兄妹……)

人通りのない、車さえほとんど通らない国道であった。

(そんなことって……)

国道に分断された墓地に差し掛かった。

例の二人組がいた。

偶然とは思えなかった。通り過ぎる風を装い、姿の見えなくなった所で墓石に隠れた。そのまま、二人組の見える位置まで戻る。

二人が調べていたのは、休場が初めてここを訪れた時に見つけた、仲野幸枝の墓だった。遠くて話は聞こえないが、休場がしたように、墓標に書かれた文字を確かめ、写真に撮り、二丁寧に書き写してまでいる。何者にせよ、姿を見かけたのが先ほどの駅であり、この場であるのなら、共通点は白居家であろう。

(後を尾けてみようか?)

とも思ったが、それは危ういと感じた。何のプロかは知らないが、専門職の人間であるなら、素人が後を尾けても、すぐに察知されてしまうだろう。それよりは……

休場は、仲野幸枝の話聞いた寺を訪ねた。住職は二年前に亡くなっている。その後、線香をあげに立ち寄った休場を、家の者は覚えていてくれた。

「富子さんの所からのお帰りかね」

四十歳ぐらいの愛想の良い婦人は、そう尋ねた。

「本場にすぐ話の伝わる村ですね」

休場は、頭を掻いた。

「今、野菜さ届けてくれたものの畑が、富子さんとこの目の前じゃげに」

線香をあげさせてもらってから、休場は話を切り出した。

「今日、訪ねて来た人がありますか?」

「はあ? ああ、今さつき」

「男の人二人ですね」

「一人じゃったけど、外でもう一人待つとつたようじゃね」

「何を尋ねに来たんですか?」

「あなたさんと同じ、仲野幸枝さんのことですね」

「で、なんと?」

「もうとうに亡くなって、その墓におるようじゃと。私もた

いして知るわけじゃなか、そんならいしか答えられんよ。あなたさんは、じいちゃんの生きてるうちに話ば聞けて運が良かったがね」

いまさら、半世紀以上も前の話を聞きに来た男たちをいぶかしむこともないらしく

「あなたさんが来るとわかっておったら、待ってもらえばよかつたねえ、もう少しよく話しがわかつたらうに」

(とんでもない…… 呑気すぎる)

休場は鉢合わせしないように、気かけながら富子のうちにとつて返した。幸い二人組に出くわすことはなかった。

さつきは、富子一人だったが、家人たちは帰っていた。老人一人をおいて遠出するはずもなく、たまたま近所に用足しに出ているのだろう。縁側の方に廻ると、

「あら、まあ」

顔馴染みになっている嫁が、驚いた様子で出てきた。

「忘れもんでも?」

「いえ」

「帰ってきたら、東京の羊羹があつたで、休場さんがみえたんじゃると話しておつたんよ」

「今、誰か富子さんを訪ねてきませんでしたか?」

「そうか、あなたさんも知り合いななかね。東京の人じゃ言う

「てもんねえ。ほんの入れ違いじゃね」

「何か言ってみましたか？」

「別に、東京で世話になったもんで、こっちへ来たんでちよつと顔見に寄つたど」

「富子さんはなんと？」

「このとおりだけんね」

嫁は、暗い家屋の中に、ぼつねんと座る富子を振り返つた。

「もう、この頃はなんもわかんなくなつて」

「富子さん……」

休場は、声をかけてみたが、何の反応もなかった。顔を上げることさえしない。今さつき、休場にすべてを話したのは、奇跡のようなことだったのだろうか。富子は、どうしても置いて行きたい荷を休場の背に移した。そして、小さく丸まっただんご虫のようになって、畳間の隅に座っている。

休場が、駅に戻つたのは、夕暮れ時だった。相変わらずここも利用客の少ない駅だった。利用客だけではない。電車の本数も少ないのだから、再び二人組に追いついてしまうことは、考慮しておくべきだった。危うく、鉢合わせしそうになって、トイレの建物の陰に隠れた。鉢合わせと言っても、向こうから、こちらのことを気付いてはいないだろう。だからこそ、余計顔を見せたくなかった。これからのことを考えるなら、せつかく

の有利は保持しておきたい。

男二人が、短く言葉を交わした。

(えっ?)

休場は、もうひとつの手掛かりを掴んだ。二人の会話は英語だった。

(ネイティブ…… アメリカかな?)

考えてみれば、他国で情報集めをするなら、その国の者、あるいは、その国の顔をしている者がいいだろう。こんな田舎町を、ザ・アメリカというイメージのおじさん二人が英語を喋りながら闊歩したら、村の一大ニュースになつてしまう。一人は日系で日本語もしゃべるようだが、もう一人は顔が日本人に見えるだけかもしれない。そういう意味では、人種の坩堝であるアメリカは便利だろう。

(いや、決めつけ過ぎかな? とにかく、何者なのかは調べないとな)

休場は、寒空の下、身を縮めながら考えていた。

浮浪者

翌日、笹原弓子は、亜子を新しい学校に送つたその足で、河川敷の男を訪ねた。

いつの間にか、弓子は祖母と同じように、人の面倒をみるようになっていた。河川敷の男は、勝手に住みついた浮浪者で、何度も役所から立ち退くよう指導を受けている。強制執行で何ヶ月か前に追い出されたのだが、また舞い戻って来た。役所として、そんないちごっこを繰り返したい訳ではないが、ここに公園を作り、その下に災害避難時のトイレや食料品の備蓄倉庫を作る計画が出来上がっている。はつきり言って、ここではない河川敷に住みつく分にはかまわないのだ。役所はここから出て行って欲しいだけだった。

「もうひと月ほどで着工するんで……」

役所を巡り巡って、福祉事務所の課長が直接、弓子のもとを訪ねて来た。

「ごめん下さい」

弓子は、ブルーシートをテントのように吊っただけの男の棲みかの前で、声をかけた。普通の訪問客のように、

「ごめん下さい」

と声をあげる。

「また、あんたか」

返事は、中からではなく、弓子の後ろから返って来た。振り向くと、いかにも長年ホームレスをしてきたという風貌の、髪も顔の皮膚もガビガビとした皺だらけの男が、猫背に丸まって

立っていた。

「はい、すみません」

弓子は、頭を下げた。

「すまないと思うんだったら、来なきやいい」

男は、弓子の脇をすり抜け、中に入っていく。弓子も後に続いた。

「そうなんですけど……」

すでに、ブルーシートの中に、慣れている弓子は、自分の居場所を器用に作って座り込んだ。

「福祉事務所の課長さんが、どうしてもあなたと話して来て欲しいって、来るもんですから」

「そんなの放っておけばいいでしょ」

「そうなんですけど」

ホームレスの言葉は概ね正しい。

「とりあえず、五百メートルほど、川上に移って頂ければいいそうなんですけど」

「五百メートルねえ。でも公園が出来りゃあ、近くにホームレスがいて危ないなんて言われて、おんだされるだろうなあ」

「そうですよね」

ホームレスの言うことは、やはりもつとも聞こえる。

その日も、発展性のない会話を一時間ほど交わして、弓子は立ち上がった。

「また来ます」

つい、弓子はそう言ってしまふ。

福祉事務所の課長が家を訪ねてきてから一ヶ月。毎日というわけではないが、時間を作っては、男を説得に訪れている。

(また来ます)結局何の解決の目処も立たないまま帰る弓子が、この言葉をいうと、男も必ず(もう来なくていいよ)と返す。

弓子は、その度(次に帰る時は、言わないでおこう)と思うのだが、どこに行っても癖になっているこの言葉を、つい使ってしまう。

ところがその日、男は何も言わなかった。何も言わず、見送るように、弓子の後について外に出た。

そして、そのまま、川の方に向かって五、六歩進むと、真っ直ぐに前を見つめたまま、言った。

「ここでなくてちや、だめなんだ」

弓子は、男の横顔を見た。男は虚空を見つめたまま、話し始めた。それは、ファンタジーのようで、掴みどころのない話だった。

「何の変哲もない人生を送っていたんだ」

男はそう切り出した。

「この前どこぞのテレビで、花粉症を説明してるのを見たが、まあ、言うなりやあ、あんなもんかなあ」

「あんなもん？」

「少しずつ体の中に花粉が積もっていつて発病するってことよ。俺の中に、何かが少しずつ積もっていつて、ある日家を出た」

男は、舌で唇を舐めた。

「仕事を放り出して、まだ小さいガキのいる女房を、放り出して……」

背後で、ブルーシートが風に当たってガサガサ鳴る。

「しばらくして、女房が俺のこと捜し当ててやって来た。でも、俺は何も話さないで、また逃げ出した。それから、今度は、ガキどもが大人になって訪ねて来た。俺はまた、何の返事も出来なかった。だって、そうだろう。何にも理由なんかないんだ。説明なんて出来やしない」

男はまた、湿らすように唇を舐める。

「それでも、初めはよ、金も貯めた。時代も良かったからな。そこいら漁れば、結構なご馳走が食べれたし…… それなりに雨露をしのぐ場所もあった。その金を持って、家族んとこ帰ろうかとも思いながら、でもズルズル十年、二十年で過ぎちまった」

弓子はただ聞いていた。

「その金を貸したんだよ」

「誰に？」

「名前は聞かなかった」

「住まいは？」

「名前聞いてないぐらいだあ、そんなもん知らねえよ」

「どんな人？」

「さあ、見かけは学生みたいだったなあ。でも違いかもしれないなあ。自転車に乗ってたよ」

本当に、ちゃんと話す気があるのだから、ないのだから。けれど、今まで何も話さなかった男が、口を開いたのである。弓子に伝えたい思いはあるのだろう。

「どうしてそんな大事なお金を貸したの？」

「どうしてだろうなあ」

男は、本当に自分でもわからない様子だった。

「どうしてだろうなあ」

男は、繰り返す。

「どうしてだろうなあ」

見も知らない若者に、ホームレスは、大金を貸した。

「必ずここに返しに来るから」

そう言った若者の言葉を信じて、毎日ここに来て待った。そのうち、住みついてしまったのだという。

強制執行で追い出されても、また舞い戻って来るほど、ここは彼にとつての聖地となつてしまった。妻も子どもも捨てた男。ようやく捜しあてた家族に何も語らなかつた男。担った責任の

すべてを裏切つた彼が、たった一度会つたきりの青年の、一体何を信じ込んでしまったのだろう。

彼の信じるべきものは、もつと他にあつたはずなのに。

翌日、また、福祉事務所の課長がやつて来た。

「どうでしょう？」

「そうですねえ」

弓子の返事は、あいまいだ。

彼は、福祉事務所の課長になる前は、納税課にいた。滞納者のことで、一悶着あつた時に、なぜかこの笹原弓子という女性に相談してみたら、と前任者にアドバイスされた。結局、そのまま何もせず、もちろん解決もしないうちに、担当部所が、福祉管理課となり、福祉事務所に配属された。そして、今回の問題を抱えた時「笹原さんに、相談してみてもどうでしょうねえ」と、長年そこに勤務している年配の女性に言われたのである。

そこまで言われると、笹原弓子という人物への好奇心も手伝つて、相談に行つてみる気になつた。もともと、民生委員もやつている。口実はあつた。

ところが、予想に反して、笹原弓子は、ごく普通の、というかむしろさえないおばさんだった。それでも、少しはテキパキと対応してくれるのかと期待したが、

「困りましたねえ」

終始そんな頼りない返事である。

(だのに、また訪ねて来てしまったのは、どうしてだろう?)
理由は、漠然とだが、わかっていた。彼女が、話を聞いてくれるからである。福祉事務所での仕事は、右にも左にも振り分けられない、解決手段の見つからないものが多い。一人で立つていられない人間を相手にするのだから、そういうものだろう。ずっと寄り添っていく以外に、解決方法はない。といって、まさか出会った人すべての、家族となれるはずもない。

弓子に相談すると、彼女はまるで、家族のことにように、耳を傾けて聞いてくれた。

「そうですか」
と心配顔で相槌を打つ。

「まもなく、着工するので、現場で手荒なことにでもなると」

「それは、いけません」

言葉だけでなく、本当に困り果てた様子になる。

「明日、また、行ってみます」

弓子には、そう返答するしかなかった。

課長は、翌々日、着工前の下見に出かけた。公園課の人々と共に、問題の河川敷に着くと、そこにあったブルーシートは、取り払われ、さんざん彼らを悩ませたホームレスの姿はなかった。

豆腐屋

豆腐屋は、白居家の敷地内に畑を作った。その畑を耕す手休め、一息つく。数日前から居つくようになった男が、いっしょに畑を耕している。

自分も、訳もなく居ついていている人間なのに、人のことを詮索する気はないが、不可思議な男だった。毎日決まって、公園を着工中の河川敷に出かけて行く。何をするでもなく、ぼーっとそこに座って帰って来るらしい。みかねたタズさんに

「暇なら、手伝ったら」

と言われ、畑を耕し始めた。明らかに、農機具など持ったことのない、おぼつかない腰つきである。

(この男にも、自分に起きたのと、同じようなことが起きたのだろうか?)

豆腐屋は、どこか途方に暮れた様子のその男を見ながら、しみじみここへ来た頃の自分を思い出していた。

豆腐を売りながら、白居家の門の前を通った。十年以上、毎日である。ある日、門に刻み込まれた彫刻のような、いつもそこに佇んでいる少女が、突然近付いてきて、豆腐を買った。それは、死のうと思っていた日だった。

豆腐屋は、親に恵まれなかった。両親ともに、働くことが嫌いだ。勤めても長続きしない。子どもの世話も面倒臭かった。

それで、中学を卒業するとすぐに、県内の商業地にある豆腐屋へ住み込みの奉公に出された。同級生は、彼以外全員高校に進学した。家を出て間もなく、実家は火事になり、両親は死んでしまった。電気を止められて、蝋燭で暮し、火の不始末が原因だったという。いい加減な両親らしい、死に方である。

親には恵まれなかったが、仕事には恵まれた。彼を雇った豆腐屋は、真面目な人物だった。厳しくされたが、かえってそれで、怠け者の親に育てられた分を取り戻せた気がした。

ただその豆腐屋は、手広く商売をしていて、跡継ぎもいたので、二十年勤めて、代替わりの時、独立させられることになった。

借家を借りて、豆腐屋を始めた。そして、すぐに人付き合いの出来ないことに困った。近所付き合いも、ましてや女性との付き合いなど思いもつかない。趣味もないし、話題もない。(自分分は、何の取柄もない人間になってしまった)と気付いた。萎縮して、世間を渡って行く自信が持てなかった。

そんな時に、出会った。十五歳年下の近くの短大に通う女子

学生である。彼女は、自宅から通っており、いつも店の前を通る。出会ってすぐ、彼女が自分に好意を持っていることを感じた。信じられないようなことなのに、言葉で確認する必要もないほど、確かなこととして感じた。自分のようなものに、こんな映画の一シーンのような瞬間が訪れるなど想像したこともなかった。

「そんなに毎日、そこに座って、私が豆腐を作るところを見ても楽しくないでしょう？」

彼の問いに、天使は驚いた顔をする。そして、真っ直ぐに大きな瞳を向けて

「すみません。お邪魔でしたか？」

と尋ねた。

一体自分のどこに、そんな風に見つめられる価値があるのか、全くわからなかった。いつ飽きてしまうのだろう、と考えた。

それでも、デートの真似事のような時を過ごしたり、相手が何を喜ぶだろうと必死に考えてプレゼントしたり、されたり、恋人ごっこのようなようだった。

しばらくして(卒業したら、この道を通らなくなる)と、彼女が心配し始めた。

「いつになったら、結婚していつしよに暮せるようになるの？」と尋ねられた。

結婚など、考えたこともなかった。明らかに彼女は、身分違

いのお嬢様である。豆腐屋の女房になるなんて、後で泣く事になる。自分はもう三十五歳なのだ。分別がある。

ある日、彼女の父親が乗り込んで来た。

「一体、どういふつもりなんだ！」

と、一喝された。

(当たり前である)

「君のことは悪いがいろいろ調べさせてもらった。君にとつては、二十歳の何もわからない小娘かもしれないが、私にとつては、大事な娘なんだ。今、いくつか、縁談も来ている。銀行マン・商社マン・外交官の卵。いや、そんなものをみんな断つたとしたつて、あの子にはちゃんと幸せになる未来が待っているんだ」

乗り込まれてみて、本当に馬鹿馬鹿しくなった。本気の人間など誰もいない。自分が一番あきれている。

店をたたんで、なんの意味もなく、思いつきで東京に出ることにした。

借家を借りて、豆腐を作り、売り歩いた。うまくいかない方が当たり前的人生だった。彼女のことだつて、結局は、故郷を捨てて見知らぬ土地に飛び出すはめになってしまった。もう若くもないつまらない男に、恋愛の幻想を抱いた女子学生。それに振り回された自分も彼女の家族も情けない限りである。

働いて食べて、自分の身を世話して、毎日ほただ過ぎて行く。

そして夕方、いつものように、家に帰った。鍵をかけることもない家。たった一間の座敷。そこに、人がいた。薄暗い中、電気も点けず、寒そうに小さくなって。泣きそうな顔が、豆腐屋を見つめる。

土足のまま駆け上がった。

「百合絵」

抱きしめた。

「おくん、おくん」

まるで、犬の遠吠えのような声をあげて泣いた。嗚咽は、抑えようもなく込上げて来た。

「百合絵、百合絵」

何度も名を呼んだ。

「百合絵」

心は抑えようもない。

「百合絵」

一度でも、この天使に触れたら……。

「おくん、おくん」

手放す恐ろしさに身が縮んだ。奪われる恐怖に、身動きも出来ない。彼女を守る力も、手に入れる資格さえないというのに。だから、分別を振りかざし、自分をこまかした。気づかない振りをして逃げ出した。

でも、今、百合絵のか細い両腕は、豆腐屋の背に廻されていった。彼が百合絵を愛おしんで抱きしめるように、彼女もまた彼を愛おしんで抱きしめている。

二人は夫婦となつて暮した。今までと何の変わりもない。豆腐を作つて、売つて、そのお金で食べて、暮す。それだけの二十数年だった。豆腐を作るしか能のない男である。そのことになんの変わりもない。

百合絵は豆腐を作る男の姿を見つめている。彼女の目は、彼の指先に驚嘆している。毎日食べる豆腐なのに、

「本当においしい」

そう言つて、うつとりと微笑む。

やがて、病で、百合絵は死んだ。それでも、豆腐屋は豆腐を作つた。売つて、日々の糧を得る。同じ繰り返しだった。

豆腐屋が二度目に声を上げて泣いたのは、百合絵が死んで、冬が過ぎ、春が過ぎ、夏さえも終わった頃だった。再び、木々の葉が落ちて、寒さに備えねばならないと思つた時、ふいに涙が零れた。すると、あの初めて百合絵がそこに座っていた日か思い出した。「おくん、おくん」と声が出た。詰まっていた栓が外れたようだった。

次の日、いつものように豆腐を作り終えた時、もうだめだと

わかつた。今日死んでも、十年後に死んでも、変わらなく思えてしまった。

(死ぬのを待つて生きるのか……)

縄を探して来て、輪を作り、梁に結んだ。引っ張つて、自分の体重に耐えうるかを試してみる。最後に、周りを見回した。作り終えた豆腐があつた。

(売つて来なくては)

そう思い直した。

(このままだめにしてしまうわけにはいかない)

豆腐を木箱に入れて、外へ出た。いつもの道を歩き、いつもの坂を上る。長い塀の途中には、いつもの少女が立っているだろう。ラップを吹きながら、俯いたまま自転車を引いていく。

「あの……」

声が出た。顔を上げると、通りの真ん中に少女がいた。

「……」

絵の中から抜け出して、彼の正面に立っている。

「はっ？」

男は、驚いて立ち尽くした。

「お豆腐をひとつ下さい」

澄んだ声が促す。

水の中から豆腐をすくつて、鍋に入れる。金を受け取り、蓋を閉めて歩き出した。

数歩歩いて、振り返った。

また、振り返った。

『本当においしい』

そう言つて微笑む百合絵の顔が、はっきり見えた。

豆腐屋は、家に帰つて、首吊りの縄を外した。

翌日、いつものように豆腐を作つた。おいしい豆腐を作つた。それから毎日、白居家に豆腐を届けるようになった。

やがて住みついて、豆腐を作り、そのうち、だんだん増えていく白居家の住人たちの為に、味噌や納豆まで作るようになった。今では、広い庭を使って、豆や野菜を栽培している。

毎日河川敷に出かけて行くその男は、数日前に笹原弓子が連れて来た。そして、思案にくれた弓子は、男を伽耶子に会わせた。男が何を感じたのかは誰にもわからない。わからないが、こうしてここに住みついた人間たちは、自分に起きたような何かが、他人にも起き得ると理解する。

だから男は、河川敷を引き上げてここに住みついたのだ。

前 川

休場は、海老沢病院で、海老沢悠一と会う約束になっていた。

午後になつて、緊急のオペが入つたとの連絡があった。明日に伸ばしてもいいのだが、どうしてもそういう気にはなれない。

近くで時間を潰すことにする。その相手に前川を選んだ。こんな事情を明かしたら、前川当人にはいやな顔をされそうだが、しかし、こうしてまめに人間関係を繋いでおく所が、休場のストロングポイントである。

早めに着いたつもりだったが、前川はすでに来ていた。

「相変わらず、早いな」

「相変わらずさ」

前川は、自嘲気味に笑つた。

「で、どう？」

「なにが？」

「つっけんどんな返事である。」

「漠然とね」

「限定しなけりや、おおむね良好」

「そりや、なにより」

「お前の方は？」

「最悪かも」

口を滑らせた。富子の告白は、休場に大きなダメージを与えている。休場は、前川が（何があったのだ）と聞いてくるかと身構えた。聞かれてもどう答えたらいいか見当もつかない。

「誰にも話せない。だからこそ、誰かに話したい。」

「何が、最悪なんだ？」

前川は、お絞りで手を拭きながら、訊いた。そして、すぐに、

「ホント正直な奴だよなあ。聞いて欲しくない顔でそんな意味ありげなこと言われても、こっちがどう反応したらいいのかわかるよ」

前川らしい返答だ。

「ホント、お前ってなんだなあ」

休場は笑った。

「なんだなあ……って意味不明だよ」

前川は、休場にお絞りを投げた。

前川と休場は、大学の同級生だった。と言っても、たいして親しかったわけではない。それなのに六年前、前川はこんな風に突然休場に、居酒屋に呼び出され、当時前川の部下だった白居明彦のことを聞かれた。

「どういう偶然か、その翌日、白居明彦から、退職を申し出る一本の電話がかかってきた。それきり、彼は現れない。そのまま切れてしまうはずの縁だった。」

その後、前川の身に起こったことは、それまでの人生の成り行きからいって当然過ぎる結果かもしれない。仕事ひとすじで、家庭を顧みない男が、妻に愛想をつかされたのである。離

婚手続きも済み、一人娘の親権は、妻の手に渡った。当時三歳だった娘は、すでに自閉症の兆候をみせ、そのことに理解のない夫を妻は罵った。

離婚が、出世の妨げになったのか。都内ではあるが、別の部署に転勤が決まった。荷物整理をしているとき、ふと、白居明彦のことを思い出した。上司として、何もしてやらなかった気がした。身辺整理のひとつのような気持ちで、ロッカーに残されたままの彼の荷物を自宅へ届ける気になった。

そこで、明彦の妹、伽耶子と出会ったのである。会ったといっても、（兄は、留守です）と言われ、明彦の荷物の入った紙袋を手渡しただけのことであるが。

休場は、何が最悪なのかを説明する訳にもいかず、とりあえず話をすり替えた。気になっていることがある。

「白居家の人口が、増えているのが気になるんだ」

「なんだよ、その言い方」

「どうして、おまえたちは、あそこに住みつく様になったんだ？」

「人聞き悪い言い方するなよ。俺達は、住みついちゃいないさ」

「おまえとハナちゃんはな。でも、他の奴らはどうさ。ああいうの、住みつくっていうんじゃないのか」

前川は、少し考えて

「俺には、あそこの人たちを否定できないよ」

「なんで？」

「わかるから」

「何を」

「何かが起きたんだってことが」

「だからさ、それって何よ」

「説明はしただろう？」

「明彦君の荷物を持って行った時に、伽耶子さんに会って、ハナちゃんのことを思い出したって説明か？」

「思い出したっていうのとは違うんだよ」

「だから、どう違うわけ？」

「もつと、具体的なんだよ」

「だから、どう具体的なの？」

「言葉にはならない」

話は、結局そこに行きついてしまう。

だから、休場には、理解できない。

前川に相談されて、休場も、前川のトラブルにはどっぶり加担している。

伽耶子と出会った時、前川の心には、一人娘の春菜のことが思い浮かんだ。妻とやり直さねばならないと思い、彼女を訪ねて行った。が、もと妻は、年下の男に入れあげて、前川と暮していた頃の、きつちりとした子どもを可愛がる母親とは別人に

なっていた。籠たがが外れたと言えば分かり易い。自閉症の子どもを持つ不安な日々から、一挙に自分自身を解放してしまったのだろう。若い男に走る育児放棄の自堕落な女になることで。

部屋には、風呂にも入れられず、お腹を空かせて、べたりと壁にくっついてしている春菜がいた。

それでも、元妻は子どもも親権も手放そうとはしなかった。取り戻すためには、戦わなければならなかった。そこに、私立探偵気取りの休場が手を貸した。当事者同士がぶつかり合うより良かったと思う。修羅場になることを避けて、娘を取り戻せた。

一ヶ月後、自閉症の相談に通うようになっていた本多病院が、白居家の建物の一面を分院として使うことになり、前川も娘の春菜ともども白居家近辺へ引っ越した。

ここにも、書くべき事柄が転がっている。

葉子のカリスマ性や彼女を賛美する人々の集まりについて、休場が尋ねた時、葉子はこう言った。

「私は、単に太陽の光を映して、光っている月みたいなもんよ。本当の力は、伽耶子にある。そして、明彦の中にも」

休場は、その時、葉子が何を言いたいのか、わからなかった。ところがこうして六年経って、人が伽耶子の周りに集まりはじめると、彼女の言わんとしたことを見直さざるを得ない。

(前川や、あの白居家に住みついている人間たちに起こった、何かってなんだ?)

「白居家と言えば、また、変な奴が増えたぞ」

今度は、前川が話題を変えた。

「変な奴？」

「開眼大悟かいげんだいご」

「えっ？」

「あの、何の選挙にでも立候補してる派手なお兄ちゃん……いやもう結構な年なのかな? 見た目妙に若いだけで」

「えええっ、大悟かよ」

休場は、あからさまにいやな顔をした。休場のキヤラからしたら、そういう失礼な反応は珍しい。

「知り合いか？」

「知り合いだなんて言われたくないけど、葉子さんは、大悟の姉さんのパトロンだったから」

「パトロン？」

「いや違うかな、なんて説明したらいいんだろう。彼の姉さんは童話作家で、葉子さんが本の出版から、それこそ生活全般まで、面倒みていたんだ」

「そりゃあ、確かにパトロンだな」

そこには、もっと複雑な事情があるのだが、それを説明する

気にはなれなかった。

「これ以上、面倒はたくさんだ」

休場の思わず出た言葉だった。

前川と別れてから、休場は、予定通り海老沢病院に向かった。気が重かった。富子から聞いた話を、自分一人で、判断するのは不可能な気がした。ずっと、そのことが頭から離れない。例の二人組のことを、笹原に報告していても、この事を見透かさずれやしないかと、後ろめたさに疲れるばかりだった。

白居葉子と知り合って、亡くなるまで、わずか二年足らずである。すでに笹原や海老沢とのつきあいの方が長くなっている。特に、笹原は、近しくなってみると、初めと随分印象が違う。いつも軽口を叩いている葉子の腰巾着だと思っていたのに、彼女亡き後のすべてを支えている。いや、もともと葉子の陰で、多くのことを動かしていたのである。

その友人である海老沢は、強烈な笹原の親派である。葉子と海老沢の立ち位置が、笹原を挟んだものでなければ、二人は結構気の合うタイプだったに違いない。が、海老沢にとって、葉子と笹原の不倫関係は、どうにも容認しがたいものらしい。笹原、海老沢、弓子の繋がりを知るようになり、海老沢の気持ちもわかってきてはいるつもりだが。いかんせん、休場が葉子の賛美者であることが、どうにも気に入らないらしく



「君みたいな、物事を平らに見ることのできる人間までもが、彼女についてそういう盲目的な発言をするのは、嘆かわしいかぎりだよ」

と説教されるのには、辟易している。

果たして今回のことを、海老沢はどう受け止めるのだろう。

海老沢は、休場の命の恩人でもある。的確な相談相手でもある。打ち明けるとしたら、彼しか居ないと思うが、安易な判断にはならないか？ 災厄を招くことにはならないか？

一階の外來は、とつくに閉まっている。ナースステーションで午後の緊急オペは、三十分前に無事終わった、と聞いた。院長室をノックしても返事はなかった。中で待とうと、部屋に入った。

暗い。真正面の窓は、白居家の森を映して、全ての光を吸い尽くす闇を抱えている。

窓際のスイッチを押した。部屋が、明るくなる。ソファの背から伸びた手が見えた。

海老沢が身体を起こした。

「あ……あゝあ」

ぼんやりとした顔を、休場に向けた。

「寝てらしたんですか。お疲れのところ、押しかけてきてすみません」

「休ちゃん、君に連絡しなくちゃと、思ってたんだけど」

海老沢は、目をこすりながら、前のソファに座るよう手招いた。

「はあ……、で、DNAの鑑定結果は？」

「休ちゃん、単刀直入過ぎるよ。人間いろいろあるんだからさ」

「じゃあ、とりあえず、そのキュウちゃんというのは、やめてもらえませんか？」

「わるいわるい、で……」

海老沢は、続く言葉捜しに戸惑っていた。それを救うかのように、休場の携帯が鳴った。

「どうぞ」

海老沢は、席を外して、コーヒーを入れた。

電話を切ると

「ヨリから？」

と尋ねた。

「ええ」

「さつき、オペの最中に着信があつて、その後、休場君を説明にやるとメールが入っていた。随分、急ぎみたいだけど、何かあつた？」

「ええ」

確かに今の電話で笹原は、海老沢に例の二人組のことを話して、ユージン・ムーアに注意するよう、説明してくれ、と言っ

た。休場の後ろめたさは、今自分が海老沢の目の前にいることを、思わず笹原に隠していることにある。

「鑑定結果について、明日まで待てないほど、待ち焦がれていたらんどうけど」

「いや、それは」

「悪いが、その笹原の話の方を先にしてくれるかな」

海老沢にしては、珍しい、有無を言わせないしゃべり方だった。

休場は、亜子を引き取りに行ったときの経緯から、話すことにした。富子のは、長らく白居家にいた人間なので、海老沢の方がよく知っているぐらいだった。

「へえ、君もいろいろ、交友関係を広げてるねえ」

とかえって感心された。

二ヶ所で見かけた二人組の写真は、ユージン・ムーアと繋がっていた。休場が調べたのは、二人が彼のボディガードとして入国している程度だったが、それを引き継いでの笹原の調査は、凄まじく徹底したもので、休場には、想像もつかないほどのものを引きずり出してきた。

「全貌が見えているわけではないので、うまく話せるかわからないんですが」

と、休場は前置きした。

「もちろん、ユージン・ムーア氏が、海老沢先生と知り合ったのは、偶然ではありません。いや、むしろ、海老沢先生に近付くために、客員教授なんてものを引き受けたのかもしれない」

「いやいや、ありえないでしょ！ 僕がそんな大物だつて？」

「ノーベル賞も、彼にとつてたいして意味のあるものではなかった。日本という国に向けて、表向きの顔を作っておく必要を感じて取つたのだらう、と笹原さんは言っていました」

海老沢は、いっしょにコーヒーを飲み干した。

「いったい、何の話になるんだい？」

「ノーベル賞の選考委員会は、ユージン・ムーアの手の内にある、ということですよ。ノーベル賞を与える為に、様々な国々の論文・研究発表を調べ上げるといふ口実を持っている」

海老沢は（馬鹿馬鹿しくなってきた）という表情を隠す気にもならなかった。

「それで、そのお偉いユージン・ムーアの正体は、何だつていたいんだ」

「今は、インテリジェンス・コミュニティ所属というところでしょうかね」

「なんだ、そりゃ？」

「スパイの親玉ってことです」

「怪我人の手術におおわらわだつた俺に急いで話したいことつてというのが、それかよ」

「こんなこと関係ないと思つてしまえば、何も焦る必要はないんでしょうけど」

休場も、少し冷めた、海老沢の入れてくれたコーヒーを口に運んだ。

「もし、すべてが本当のことなら、恐いですよ」

「はつきり言つて、僕は何も恐くないよ。そんな雲の上の世界とは、何の接点もない」

「僕は、実際には、白居家のことは何も知らない。看護師の心臓発作も、消えた木と亜子ちゃんの母親のことも。笹原さんに聞いて知つただけです。」

その力が、僕に振るわれた。自分自身も死になつたじやないか、と言われてさえ、うそだと言つてしまいたい。そうすれば、こんな異常な世界と関係を持たずにすむんですからね」

休場の言葉は、思いがけない反撃だった。

（その通りだ。看護師の死に自分もあれほど動揺した）

「ここからは、もつと信じ難い話になっていくんで……」

休場は、もう一度前置きをした。荒唐無稽を競うなら、白居家の事件を引つ張り出すのは確かに、いい前振りだ。

「そのインテリジェンス・コミュニティという機関が、各国に設置されるようになったのは、最近のことです。つまり、テロに対抗するには、情報の共有化が必要であると、世界中が身に沁みて実感したということでしょう。といつても縄張り意識を

なくせる訳じゃありませんからね、有名無実の機関に成り下がっていた。そこにノーベル委員会が目をつけた」

「そのノーベル委員会って何者よ」

「表向きは、賞の授与の為の審査委員会ですけどね。」

二十八年前、アメリカのある町が消えたんだそうです。臨界核実験の失敗と発表されて、あらゆる形で事態の收拾が図られた。でも、どう取り繕っても、なぜ町が消えたのかわからない、というのが本当の所です。このグローバル化の時代ですから、秘密とはいえ、知っている人間は知っている。誰だっけ消えた町の二の舞はごめんなんです、真相を解明したがついている。もっともらしい機関を作って、陰で、政局、国籍にさえ関わらず活動している、というのが笹原さんの調べです」

もう、海老沢には全く言葉が出なかった。

「そりゃ、説明されても、無理だわ」

聞きたくないオーラを発散している。

「僕も、海老沢先生にそんな説明してもどうかと思ったんですけど」

「じゃあ、聞かなかったこととしておこう」

「笹原さんが、ユージン・ムーアが、海老沢先生を使ってこちらへ近付いて来ようとしているのだから、先生にも、自覚を持つておいてもらわないと、相手に利用されることになると思うんで……」

「だめだ、ちよつと休憩」

海老沢は、席を立ち、二杯目のコーヒーを注ぎに行った。

「具体的に何か今、僕にするべきことは？」

「ユージン・ムーアからコンタクトを取ってきたら、すみやかに知らせて下さい。それから、彼との会話の録音、これは、普通会話と携帯用録音の機器を提供します。相手の意図がわからない以上、こちらからは手の打ちようがない」

「スパイ合戦かい？ そんなスパイするほどの何があるついでうんだ」

そう言いながら、海老沢は（ある）と、気付いている自分を自覚した。（すでに、巻き込まれているんだ）

そして、今、海老沢の決心は、このことと呼応しているのかもしれない。

「DNA鑑定結果の話をしよう」

海老沢の方から切り出した。

「結果は…… 何も語ってはくれないよ」

「どういうことですか？」

「四つの鑑定対象物は、最新のSTR法、ミトコンドリア法、二通りで調べてもらった。私の後輩ではなく、民間の研究所に。法廷で相続を争っているかのようなふりだね」

「すみません。じゃあ、かなり高額でしたね」

「そんなことは、どうでもいいよ。前回明彦君のDNAのことで、懲りたからね。不審に思われるようなことは避けたい。だから、四つの検体については、全てを伏せた」

休場は、じっと海老沢の説明に聞き入った。が、話はそのままだった。

「鑑定の結果については、こちらで判断しなくてはならない。

君が何を調べようとしたのか、説明してくれ」

休場は、迷った。返事に窮した。

「仮に、四つを、A・B・C・Dとするなら、BとCは、同一人物のものであり、AとDは、異母兄弟もしくは、血縁的に濃い従兄にあたるのかもしれない。そして、彼らは先に述べたB・Cとは、全く血縁関係はない」

海老沢は、頭を掻きまわった。

「君は何を期待して、調べさせたんだ。まず、そこを聞かないことには、どうにもならない」

「いや、同一人物のものっていうのは、変でしょう？ 何か向

こうの手違いが……」

「僕もそう思うが、何も知らないのに、突っ込みようもないだろう。誰を調べようとしたんだ。笹原の指示ではないんだな。

君はさっき笹原からの電話にここにいることを言わなかった。

つまり、今回のDNA鑑定について隠しているってことだ」

「その通りです」

「富子さんか…… 彼女は長い間、白居家に奉公していた。古いことも知っているだろう。彼女が何か言ったのか？」

「その通りです」

「もしかして、笹原の父親と友康の父親が同じ人物だということじゃ？」

「なぜそう思うんです」

「そりゃあ、結果を見たときからずっと考えていた。いろいろに。どういう可能性があるのか。つまり、笹原の母親は、忠保の娘ではなく、笹原には白居家の財産に対するなんの権利もない」

「ずいぶん、話が飛びますね」

「伽耶子ちゃんか、明彦君のDNAを持ってきたのだろうが、笹原とは赤の他人と出ている」

「なるほど、さすがです」

「当たり前なのか？」

「大はずれですけど」

「いい加減にしろ！」

海老沢は、思わず大声を上げていた。深夜である。休場は、慌てて取り繕った。

「すみません。からかうつもりはないんです。僕にも全くわからない。どう考えたらいいのか」

それは、本当のことだった。もう、ここは、海老沢の判断に頼るしかないだろう。

富子を訪ねたときのことを話した。

富子は、すべての記憶を失おうとしているというのに、その四十年以上昔の晩のことはよく覚えていた。

嘉一郎の祖母が死んだ、通夜の晩のことだった。忠保は、目の上のたんこぶであった義母の死を、喜んでいようでさえあったと言う。妾たちを通夜の席に侍らせた。忠保が結婚前から関係を持っていた一番古株の女は、娘芳江を連れていた。二十歳を幾つか越えたその娘は、通夜というのに派手なワンピースを纏っていた。

嘉一郎は、十三歳。背の低い貧弱な体つきは、とても中学生になったとは思えないものだった。富子は、彼がすぐに人の多さに疲れ果て、部屋に戻っていくのを見ていたそうだ。それにしても、通夜の間にじゅう部屋に籠っているのもどうかと、様子を見に行くと、嘉一郎の部屋から鼻歌混じりで、あるうことか自分のものと思しきレースのパンツをヒラヒラと持ったまま出て行く、芳江を見た。

慌てて襖を開けて部屋に入ると、未熟な下半身を剥き出しのまま仰向けに倒れている嘉一郎がいた。富子の姿を見ると、ひきつけを起こした赤ん坊のように、ぶるぶると震えて泣き出し

た。前を隠すこともせず、ただただ怯えていた。

誰にも何も言えなかった。嘉一郎を抱き起こし、寝巻きに着替えさせて、布団に入れた。奥様には、(ぼっちゃまは、熱を出されたので、先に休ませました)と告げた。

その後、芳江の悪い噂は、山のように聞いた。赤ん坊が生まれたことも知っていたが、別にその日のこととは、結び付けなかった。男はいくらでもいたのである。

ところが、それから十年以上も経ったあの日、富子は、芳江が白居家を訪ねて来たのを知っている。立ち聞くつもりではなかったが、聞いてしまった。最後の金の無心だと言っていた。子どものことをネタに嘉一郎はずっと、強請られていたということだろうか？

「あたし、この町を出ることにしたの。もう帰って来ないわ」

「一人ですか？」

「男といっしょよ。当たり前じゃない」

「二人？」

「あはっ？ 何聞きたいわけ？ ふうくん、アパートの押入れに入れっぱなしになってるわ。いるならどうぞ。生かすも殺すもあんた次第ってわけね」

芳江は、そう言って去った。

嘉一郎は、アパートを訪ねて行かなかった。殺す方を取った。

休場が富子から聞いた、笹原の出生に関する話のすべてである。富子の懺悔でもあった。

「それで、笹原と白居家の兄妹のDNA鑑定か？　でも、もうひとつは誰なんだ」

「樋山友康です」

「なんで？」

「忠保の愛人の子なんだそうです」

「そんなこと」

「経緯いきまうを聞きたいですか？　朝になりそうですけど」

「でも、鑑定結果は、そうはならなかった」

「富子さんが嘘を言ったってこと？」

休場は、納得がいかなかった。

「恐らくそんなことはないだろう……」

海老沢は、三杯目のコーヒーを入れに立った。

コーヒーの香りの中で二人はしばらく、押し黙っていた。

「姉さんの息子二人が医者になって、今、この病院に戻って来てるんだ」

海老沢から、突然の世間話である。

「……」

「義兄さんが経営はしつかりやってくれてるし。取りあえずは、

一、三人勤務医を増やすことになるけど」

「なんの話です？」

「俺、医者辞めようと思ってるんだ」

「なんで、突然」

「医者になってすぐ、十年もヨリに付き合わされていたんだ。もう一度研究に戻ったっていいんじゃないかと思って」

「それでどうするんです」

「いろいろ調べたいんだ。白居家にも、この病院にも、秘密がある。ついでに、DNAの謎も調べてやるぞ！」

「話をはぐらかしたいんですか？」

「いや」

海老沢の表情が変わった。恐いほど、真剣な面持ちで休場に向き合う。

「ヨリに話すつもりか？」

「それは……。話せることじゃないのは、わかるけど、こんな運命に関わるようなことを当の本人に黙っているなんて。笹原さんが嘉一郎さんの子だったことは」

休場が、そう言った途端、海老沢の手が口に飛んできた。休場の口を塞ごうとした手は、いやというほどに、休場の歯に当たった。前歯を殴られたような衝撃だった。かえって海老沢の手の甲が切れ、出血していた。休場は、海老沢の手首を掴んで自分の口から引き離した。それでも、

「言うな、言うな、言うな！」

そう叫びながら、海老沢は、休場の口を塞ごうとする。

「止めて下さい！」

休場の声も荒くなっていた。

腕力は休場の方がある。海老沢の肩を掴んで捻り伏せた。海老沢は、そのまま、床に倒れ付す。休場は、手を離して立ち上がった。

「このとおりだ、頼む。言わないでくれ。奴には言わないでくれ」

海老沢は、そのまま頭を床に擦り付けるように、土下座した。

(芝居じみてる)

休場は、この成り行きに辟易しながら、ソファに腰を下ろした。コーヒーに手を伸ばす。

しかし、海老沢は土下座した、そのままである。

「いい加減にして下さい。こんな茶番劇」

「頼む、ヨリに言わないでくれ」

床に這い蹲ったまま、海老沢は繰り返す。

「海老沢先生、止めて下さい」

仕方なく、休場は、膝をついて海老沢を起こした。

「ヨリにとって、嘉一郎は……」

どう言えばいいのか、言葉が見つからなかった。

「自分があいつの子どもだなんて知ったら、奴は生きていけな

い」

海老沢の歯噛みが聞こえてくる。

休場は、約束するしかなかった。

「わかりました。絶対に笹原さんには言いません」

血を流した海老沢の手は、休場の肩をきつく掴んだ。

「これ以上、奴を追いつめないでくれ」

雪 那

まだ、辺りは暗かった。コンクリートの街にも、地と空の切れ間はあつて、こんな時間帯には、闇を押し払う力を見せてくれる。

休場は、白居家の森に居た。海老沢とは、結局夜を徹して話し合うことになってしまった。別れ際に、

「大悟、白居家に転がり込んでいるんだって」

と聞いた。

「ああ」

海老沢は、複雑な表情をみせたが、そのことについては、何も言わなかった。ただ、

「そろそろ雪那さんの散歩の時間だな」

院長室の窓から、白居家の森を見下ろして、そう言った。

切り株に座っていると、ズズズつと物を引き摺るような音が聞こえてきた。背後の森を振り返る。音は、本当にゆっくりと近付いて来た。まだ、森は闇である。空に差す光が見える薄闇である。

相手が人の姿に気付いて驚くことのないよう、先に声をかけた。

「雪那さん、休場です」

ズズズつという音は、一度立ち止まり、また、進み出す。少しかだけ、急いだ様子で。やがて、大木の陰に姿を見せた。

休場は、穏やかな笑顔を向けた。

どう表現されるべきなのだろう。休場の目が捉えた、その姿は。何度見ても、直視することを避けたくなる。その醜さゆえではない。痛ましさのせいである。

『神経線維腫症』

病名だけで呼ぶなら、明白だった。主には、皮膚の異常な増殖。乳頭状の腫瘍が、弛んで垂れ下がる。但し、この障害は、個人差が大きい。

医者に診て貰う必要さを感じない六十%の患者。「深刻な外見的障害」を被って治療を願う残り四十%の患者。それは瘤があるとか、腕や下肢が変形しているといったものである。

彼女ほどの症状を呈したものは、数えるほどしかない。た

だ、その患者に冠された病名がある。エレファント病である。

雪那が、人と会わないように気をつけているのは、相手を見やつての面もある。小さな子どもにとっては、お化けと出会ったとしか思えないだろう。

雪那の神経線維種は、体中にある。特に頭部。彼女の場合、脳膜が、眼窩の後部に入り込まないようにする蝶形骨が先天的に失われていて、脳が頭蓋腔におさまらず、眼の領域を侵していた。

脊柱も湾曲しており、杖を持たない歩行は困難だった。上唇から突き出した皮膚組織は十センチを超え、会話や食事さえ、難しいものにした。

何度も手術を受けて、腫瘍を取り除いている。一度、休場は、海老沢の行なう手術に立ち会った。葉子に書くことを命じられたのだから、なんでも見ておかなければならない、と雪那自身が言ったのである。

雪那の手術を見た後、普通に食事が喉を通るようになるまで、数日かかった。海老沢が、腫瘍にメスを入れると、中にはうじ虫が蠢いていた。それは、筋繊維でうじ虫などではないことを、理性は休場に教えていた。が、休場の目はそれを否定し、彼の悪夢はいつも、雪那のすべての瘤からうじ虫の這い出してくる光景だった。

その上、手術の結果は、数年後には打ち消される。腫瘍は増

大していくのだから。

神経線維種症の患者は、家系に同様の患者を見つけられないことが多い。突然変異の遺伝子が、腫瘍を成長させる信号を身体に送るといふことだ。

雪那は、グレーのカーデガンを羽織っていた。杖が、大きく右に傾いた体を支えている。垂れ下がった額のせいで、左目は見えないが、逆に右目は常人の三倍にも膨れ上がっている。頬は、童話の瘤取りじいさんそのままの様子で、口は河豚のように突き出ていた。

「おはよう、休場さん。今日は、こんな時間にどうなさいましたの」

くぐもった声ではあるが、理性や穏やかさの滲み出る声音だった。

(偏見は拭えないものだ)

彼女に会ったびにそう思う。今の言葉が、この姿から発せられた、とはどうしても思えないのだ。

「今まで海老沢先生といっしょにいたんです」

「そうですね」

「そう言えば、先生は、医者を辞めると言っていましたか」

「そうですね」

(患者としての雪那は、困らないのだろうか?)

休場のその思いを見透かすように

「私がお話したことが、切っ掛けかもしれません」

雪那は、そう答えた。

「葉子さんとの約束を果たしたんです」

「約束？」

雪那の顔の筋肉が微かに動いた気がした。微笑んだのかもしれない。

「海老沢先生は、葉子さんを嫌ってらしたから、海老沢先生への葉子さんの遺言は私がお預かりしてましたんです」

「初耳ですね」

雪那は、葉子の二つ下。不思議な取り合わせだったが、二人は仲が良かった。

「亡くなる一週間ほど前にいらして、時期が来たら、海老沢先生に伝えて欲しいと言われたの」

「何をですか？」

「葉子さんの遺言」

「どんな？」

「読み解くこと」

「読み解くこと？」

あまりに簡潔すぎて、何もわからない。だが、(俺が言われたのは、書くこと。そして……)

「あなたに残された言葉は、思い出すこと、前にそう話してく

れましたね」

休場は、葉子の周辺を、「書く」ために、取材してきた。当然、雪那にも、何度も話を聞いている。雪那は、葉子から「思い出すこと」を託されたと言った。

「思い出すこと。読み解くこと。そして、僕には、書くこと。なんなんですかね？」

「なんなのでしょね」

「今まで、訳がわからないと思っただけ、三つ並べたら、僕のが一番ましかもしれない」

「その通りですね」

雪那は、きつと笑ったのだと思う。突き出た口元が少しだけ「イ」の形に広がった。

「でも、なんで六年も経った今が、その伝える時期なんですか？」

「一週間前、私、海老沢病院に担ぎ込まれたんです。今度こそ死ぬかと思いました。時期も何ありませんね。今までいつ言ったらいいのかと思っただけ、言わない前に死んでしまつては約束が果たせないですもの。で、お話ししたんです」

「それで、先生は、医者を辞める事にしたと？」

「違いますか？」

「そんなことで、辞めますかね」

「さあ？」

会話が途絶えた。

「ねえさ〜ん！」

遠くから、彼女を呼ぶ声がある。雪那が、小首を傾げる。

「弟が心配して、捜しに来たようです」

「じゃあ、僕は失礼します。また、そのうちお訪ねします」

「そんなに弟が苦手ですか？」

「申し訳ないけど、苦手です。では、また」

休場は、開眼大悟と会わなくて済むように、声とは反対側へ急ぎ足で去った。

母 親

休場は、忙しかった。

(なんでか?)

自分でもよくわからない。何に備えているのだろう。

まったくの偶然なのだが、笹原の秘書は、休場と小・中・高と同級生だった。手も足も出ないほど、完全無欠の才女だった。

その彼女が、笹原の情報をいろいろと送ってくる。もちろん、笹原に指示されてのことなのだが、休場にとっては、キャパシティを超える情報量だった。

(この中から、適切に重要な情報を選び出せということか)

だが、身構えるべき相手も、何に警戒すべきなのかもわから

ない。一体、ユージン・ムーアが、何をしかけてくるというのだ。

一ヶ月は、あつという間だった。

そして、風は別の所から吹いた。

「すぐに、自宅へ来て下さい。お願いします」

突然、弓子から呼び出された。

いっしょに、亜子を迎えに行つた後にも、何度か顔は合わせている。例えば、雪那の見舞いに行つた時、亜子を連れて、白居家の手伝いに来ているのに出会つた。あるいは、海老沢がその後どうしているか様子を見に行つた時「知り合いの見舞いで」と、海老沢病院にいた。別に何か気にかかることのある様子ではなかつたと思う。

が、今、弓子の声には、差し迫つたものがあつた。

(何が起きたのだろう?)

想像がつかない。

笹原家の門をくぐると車庫の所で、夫婦で言い争つていた。

「鍵を渡せ!」

笹原が、弓子に怒鳴っている。途方に暮れた顔の弓子と目が

合った。

「休場さん!」

弓子は駆け寄つて来た。そして、車のキイを押し付けると振

り返つて、笹原に言った。

「休場さんが運転して行つてくれます」

明らかに、むっとした表情で、笹原は踵を返す。

「何か?」

弓子の問いに

「パソコンを取ってくる」

そう答えて、玄関を入つて行つた。弓子は、振り返つて休場と向き合う。

「突然にすみません」

頭を下げると、走り書きのメモを休場に手渡した。

「夕方、白居家に電話があつて、タズさんが受けました。身元不明の女性がこの病院に搬送されたそうです」

メモには、病院名と電話番号、住所が記されていた。

「七、八十才の女性で、公園に倒れていたとか。ホームレスだろうとのお話でした。身元を示すようなものは見つからなかつたようですが、財布の角に、古い小さく折りたたんだ紙が入つていて、白居嘉一郎という名と、電話番号が書かれていたそうです」

「それで、電話がかかってきたというわけですか」

「タズさんは、思い当たることはないと言いました」

「あなたは、何か思い当たつたわけですね」

「お母さんではないかと」

「笹原さんのお母さんということですか」

「はい」

休場は、大きく息を吸った。

（なぜ、今なんだ）

「それで、電話を掛け直して確認したのですが、なかなかはっきりしません。どうしようかと思つて、とりあえず、笹原に相談してみたら……」

今の様子では、笹原は即座に車を走らせて病院に向かおうとした、ということであろう。

慎重な男である。自分で運転しているところなど、見たこともない。移動時間は、仕事時間と思つている。

「普段運転なんてしないのに、あんな風で、事故にでもなつたらと思つて」

それで、休場に電話をして、車のキイを握り締めて待つていたという訳だ。

笹原が鞆を持って戻つて来た。

「出発するぞ」

と言つた。車の施錠を解くと、後部座席に座つて、鞆からノートパソコンを出した。

「私も行きたいのですが」

おずおずと弓子が言う。笹原を心配してであろうが、

「大丈夫です。任せて下さい」

休場は、請け負つた。これ以上、笹原と弓子を言い争わせる気には、なれなかつた。

「よろしく願ひします」

深々と頭を下げる弓子に見送られて、出発した。

ルームミラーで、ちらちらと笹原の様子を見る。いつものように、パソコンからの情報に目を通して様子である。しかし、休場は、笹原が、そこに集中してないことを感じていた。病院を、ナビで調べた。五時間弱かかる。十一時を過ぎてしまふだろう。それでも、どうにか面会させてもらうしかない。

実は、休場は、笹原の母親と面識があつた。六年前、葉子たちの母親について調べたように、葉子の愛人と言われていた笹原についても調べた。母親の消息も追つてみた。途中、葉子が亡くなって、中断していたが、書くということに取り組み始めると、その部分は明らかにしておきたい気がした。

笹原芳江は、富子の話通りの女であつた。セックス中毒、昔ながらの言葉で言うなら、色情狂であろう。

南国の町まで追いかけて行つた。六十九才にもかかわらず、すでに八十といつてもいいような老け方をしていた。なのに、毒々しい化粧をしている。彼女の人生そのもののような、自随

落と節操のなさが、滲み出ていた。

漁師をする老人たちを床に誘い、多少の金にありついてはいる。旅行者を装って、声をかけた休場にさえ、卑猥な言葉を使って誘いをかけた。

休場は、葉子の言葉に従って自分を雇い入れてくれた笹原に、恩義を感じていた。だから、知ってしまったことが、背信行為のように思えた。見てはならないものを見てしまった。

「もし、笹原芳江の消息が掴めたら、教えるよ」

笹原の反応を見るように、そう言ってみてみた。

「いや、こちらから捜す気はない」

笹原はそう答えた。

意外だった。

(こちらから捜す気はない)

ということとは、連絡があつたら、会うということか。

(こちらから……)

それは、笹原の意地なのか。本当は、連絡を待っているのか。

考えてみれば、十才ぐらいまで、笹原は母と暮っていたのである。赤ん坊のときに、捨てられたわけではない。それなりの思いがあるのかもしれない。

しかし、富子の話から考えるなら、母親の方はどうだ。嘉一郎が、子どもを助けると思って、アパートに置き去りにしたのだろうか。それは有り得ないだろう。

嘉一郎は、十三才で腹違いの、十も年上の姉に犯され、それから十年余、彼女のお腹に出来た子で脅され続けたのである。どこに、子どもを助ける可能性があるのか。

芳江は、わが子を殺すつもりだった、あるいは、殺すつもりさえもなかった。

それでも……。

笹原の力を持つてすれば、すぐに母の消息を見出すことも、会いに行くこともできたはず。

「こちらから捜す気はない」

(裏を返すなら、そんな目に合わされても、待っていたのか)

ナビの予定より早く病院に着いた。国道から入るとすぐの、

町の入り口にあるような病院だった。休場が訪ねていった南国の町によく似ていた。海の背景が似合う。

夜間のナースステーションには二人の看護師がいた。昼間電話をもたらった身元不明の女性に一目合わせて欲しいと頼んだ。

知り合いかもしれないと思い、五時間車を飛ばして来たのである。違えばすぐにでも帰ると話した。

二人とも当惑気だったが、年長者らしい方が

「じゃあ、とりあえず、案内します」

と言ってくれた。

休場は、廊下を歩く間も、何度も笹原の顔を盗み見ずにはい

られなかった。いつもと変わらない。いや、いつもと変わらないふりをしている。

「こちらです」

そつとドアを開けて、入ったのは、十床以上もベッドの並んでいる大部屋だった。カーテンは、殆んど閉められていない。老人が多いせいだろうか。

看護師は、馴れた足取りで、奥へ進んでいく。一番窓際のベッドだった。ベッドの上の小さなオレンジの灯りを点けると、布団の中で眠る老婆の顔が、浮かび上がった。覗き込んだ休場は、六年前より一層痩せて老け込んではいるが、確かに笹原芳江であることを確認した。

そのとき、部屋の外で、何か金属の食器のようなものが、落ちる音がした。深夜の静まり返った廊下に、反響する。そして、

「キヨさん、また、やつちやつたよ。看護師さん、看護師さん」

男の、くぐもつた声が呼ぶ。

「すみません、ちよつと」

慌てて、看護師は、廊下へ飛び出して行った。

「間違いないのか」

今まで一言も発さなかった笹原が、突然口を開いた。

何を聞かれたのか、一瞬戸惑ったが、

「間違いない。笹原芳江さんだ」

休場は答えた。

笹原がベッド際に近寄ると、今の物音が耳に届いたのか、老婆はゆつくりと目を開けた。夜中突然見知らぬ男たちが、枕元にいる。そんなことは、彼女には関係ないようだ。魔女のような痩せ細った手を、布団からゆるゆると出して、なめくじのように時間をかけながら、起き上がった。そして、笹原へ、右手を差し出した。笹原は、まったく動かなかつた。すると、老婆は、上掛けに手をつけて、笹原の方に体を近づけた。二人とも、女の意図をまったく理解出来ないうた。

そのとき、再び廊下から、看護師と患者らしき女やら男やらの喚く声が聞こえてきた。

「キヨさん、やめて。誰か、田中さんと呼んできて頂戴。ナー スコールを押して！」

状況は、わからなかつたが、見過ごす訳にもいかず、休場は、廊下に飛び出した。

キヨさんらしき女性が、真ん中に座り込み、点滴を吊るす金具が倒れている。が、どうやらそれは、その隣りにしやがみ込んでいるかなり高齢の老人のものらしく……向こうからもう一人の看護師が駆けつけてくるところだった。

「田中さん、キヨさんが暴れて！」

暴れているには見えなかつたが、点滴の袋は確かに、廊下の壁に投げつけられたようだ。もう一人の看護師が田中さんなのである。

そこで、唐突に、しゃがみ込んでいた老人が、キヨさんを叩き始めた。たいした力ではないが、訳がわからない。本人たちもわかっているとも思えない。

「やめなさい」

田中さんが間に入ろうとしたが、こぼれた点滴に足を滑らせて、転んだ。

その騒ぎの横を、病室から出て来た笹原がすつと通り過ぎた。
(えっ?)

という表情で、それに目を走らせたのは、案内してくれた看護師だった。

「人違いでした」

休場は、咄嗟に言い訳し

「お手数をかけて、すみません」

と、言い残して、笹原の後を追った。

「帰る。車を出せ！」

笹原は、外に出ると、乾いた声で、休場に命じた。

潮の香りが鼻をつく。

ロック・オフにすると、笹原は運転席に滑り込んだ。そして、休場が助手席に座ると、キイを取り上げて、差込み、急発進させた。

(何を言われたのか?)



まさか、この短時間にあの訳のわからなくなっている老婆が、笹原に話をしたとは思えない。

「俺の父親は、白居易一郎なのか？」

返事を用意する前に、いきなり問いは、発せられた。

「あの女に、そう言われたのか？」

病室で、ゆるゆると笹原に近付く老婆の姿を思い出した。あの時、笹原の耳元で女は何を囁いたのだ。自分の息子を、どこまで地獄に追い落とす気なんだ。

笹原は、休場の取り繕おうとする表情を見て取る。

「知ってたのか！」

運転を放り出して、助手席の休場に掴みかかった。

町を出てすぐの、海岸に面した国道。切り立った断崖に沿って、カーブしている。ハンドルを離そうものなら、ガードレールを突き破って、何メートルも下の海にダイブすることになる。

「馬鹿野郎！ ハンドルを放すな！」

休場は、笹原を振り払ってハンドルにしがみつく、遊閑地の砂利山に乗り上げた。

「運転は俺がする」

休場は、冷静さを装った。

「知っていたんだな」

ごまかせない。笹原は繰り返す。繰り返しながらも、視線は、

宙を彷徨い、休場を捕らえてはいない。答えはいらぬのだ。答えはすでに、彼の中にある。

あのぬらぬらとした生き物は、硬直した笹原の体を這い、臭いを嗅ぎ、耳元で囁いた。

「か・い・ち・ろ・る・う」

そして、萎びた、それでいて妙に生暖かい手を、笹原由宜のズボンの中へ差し入れてきた。

(かいちろう…… それは、誰だ…… それは、あの男だ…… それは、あいつだ)

「どうして、あいつなんだ！ あいつは、なんだ！」

襟首をつかんで詰め寄る。

「おまえは、知っていたんだ！ おまえは、知っていたんだ！」

「何のことだ、落ち着けよ」

惚けようとした。が、相手は聞いてもいない。

笹原の両手が休場の首に回って締め付ける。休場は、後ろ手で車のドアを開けた。夜気が、ゾクツと体に当たった。そのまま、腰をずらして、車外へ落ちる。笹原の体も重なりあつたまま、落ちて来た。が、首を掴んだ手は離れない。狂気の目が間近にあった。何も映っていない目。今、絞め殺そうとしている相手さえも見ていない目。

休場は、渾身の力で跳ね除けようとしたが、どうにもならなかった。抵抗しているはずの自分の手に力がこもらない。酸素

「説明を聞こう」

突然声が耳に入ってきた。運転中にもかかわらず、助手席に視線を移した。

「前を見て、運転しろ」

隣りにはいつもの笹原がいた。有無を言わせぬ口ぶりも、いつも通りだった。

休場は、問われるままに、これまでの経緯を話した。自分のことが語られているにもかかわらず、笹原の質問は適切だ。先ほどまでとは、別人だった。

「海老沢も知っているとということか」

「心配してました。絶対に、あなたに知られるなど言われた」

「あいづらしい」

笹原は、シニカルな表情を浮かべた。

「叙情的すぎる。僕に加えられた虐待、透子の病、そしてこの出生の秘密とやら。」

個人の身に起きた悲劇を引き比べてみても仕方ない。

アフリカの子どもたちは、飢餓で死んでいる。紛争国の少年は、麻薬によって兵士に仕立て上げられ、文明国で長寿を誇れば、老人の孤独、虐待、痴呆、いたるところに悲劇がある。それら個々の不幸を比べてみても意味はあるまい」

走る車の前方、ヘッドライトに浮かび上がる路面を見ながら、淡々と話す笹原の声が耳に入ってくる。

「だから、どうだって言うんです？」

「それだけだ」

「それだけって……」

「たいしたことじゃない。悲劇の溢れたこの世界で、僕の身に起きたことなど、たいしたことじゃない」

「それは……」

「少し寝る。着いたら起こしてくれ」

笹原は、サツサとドア側に身を丸めると、目を瞑った。

休場の興奮した心と体は、真夜中を走る車の中で、徐々に落ち着いていった。そして、頭の芯が、満天の星空の織りなす静寂に冴えていく。

こんなわずかの間に、笹原は多くのことを理解した。

嘉一郎が、彼の母と関係を持つに至った経緯を知り、自分に向けられた嘉一郎の憎悪の正体を知った。嘉一郎もまた、姉の狂気にさらされて、歪められた被害者だと理解する。

知る、理解する、客観的な把握。

（そんなことが、あなたを救うのだろうか？）

危うく絞め殺される場所だった。まだ一時間と経っていない。なぜそんな、他人事のような理解を示せるんだ）

明け方、車は、笹原家に着いた。丸まったまま、眠り続ける

笹原。起こそうと、伸ばした手が止まった。朝の光がガラス越しに、泥まみれで眠る男を照らす。

「これ以上、奴を追いつめないでくれ」

海老沢の言葉が、思い浮かんだ。

(絶対に笹原さんには言いません) そう誓った。でも、彼は知ってしまった。そして、自分への虐待も、愛娘の死も、出生の秘密も、世の中に起きている多種多様な悲劇のひとつに過ぎないと言った。

(うそだ！ いつも、ただ装っていたのか……)

首に、絞め殺されそうになった、ヒリヒリとした痛みが残っている。あれが、笹原の本当の姿だ。

笹原はヘッドライトに向かって真つ直ぐに走って行った。

火に飛び込む虫は、果たして、死にたいのだろうか生きたいのだろうか。

笹原の示した理解は、神の領域、人はそんなふうにはいられない。彼が生きてくるために、その強さが必要だったというのなら、そんな強さは、悲しいだけだ)

休場は、自分が泣きそうになっていることに気付いた。

一人車外に出た。早朝の空気を吸う。ゆっくりと煙草に火を点けた。

(いつか来るのだろうか？ 笹原に加担すべきか、彼をこそ、葬るべきか、そんな選択を迫られる日が……)

「これ以上、奴を追いつめないでくれ」
海老沢の言葉を嘔み縮める。

玄関に人影が動いた。恐らく、眠らずに待っていたのだろう。

笹原の妻が、こちらへ駆け寄って来る。

(続く)